

〔類聚名物考 地理十四〕山峽 やまのかひ 峽和名抄、山のかひ

かひはあひといふに同じ意なり、萬葉集に、背山を曾加比と訓たるはせがみといふが如し、それとは似て心たがへり、間といふにちかし、○中略

かひ 峽 甲斐がね

南嶺遺稿 第三かひがねといふは、山のするどく立て、諸山に勝れ目立たる峯を云ふ、山のかひよりみゆる白雲などよむも、絶頂に在る白雲なり、甲州はするどく高き山多き故、かひの國といへりとぞ、或人の仰られしにつきて、よく思へば、俗語に甲斐々々敷といふ詞有り、又かひなきといふ詞あり、甲斐々々しきは、しかとその物の見えたるを、山の高く見えたるに准らへ、甲斐なきは功も無しといふ心なるべし、○中略 山のかひとは、峽字を訓て、字書に、サカシウシテハ、サムミヅヲ山峭夾水曰峽と見えたり、蜀楚の交の山に、三峽といふ山有るも、峯谷の行交て、三所峽の在れば云ふ成べし、山の絶頂にはあらず、萬葉にこの詞多くあり、そかひとも云ひ背向とも書り、そむきあひの略にて、山のそばだちたるを云ふ、そかひに見ゆる、山の白雲もそれにて聞えたり、又甲斐國も、山そばたちさかしければ、かく云ふなり、くたもの、甲たる説は、埒もなき事なり、徂徠翁が、甲斐國の道記を、中峽紀行と名付しも、是を思ひて書るなり、そがひに立るそか菊とよめるも同じ詞なり、甲斐は假名書なり、義はあらず、

峽 かひ を

この訓、和名抄に山のかひと訓り、古事記には豁八谷峽八尾と有るによれば、尾と同じく訓り、いづれにも時によるべきなり、

〔延喜式祝八〕大殿祭

今奥山 乃 大峽小峽 爾 立留木 平、齋部 能 齋斧 平 以 伐 採 下 氏、○